

■世界では貧困・災害の克服も平和の条件

大学時代に放浪の旅、アジアの虜に

「善意だけでは何もできぬ」失敗に学ぶ

フランスのMSF（国境なき医師団）や米国・CAREインターナショナルなどの年間活動費は百億円前後から数百億円。これに対し、AMDA（アジア

医師連絡協議会）の予算はせいぜい六、七億円。もちろん欧米のNGO（非政府組織）は政府から手厚い援助を受けているのですが、決定的な違いは人道援助に対し、国とNGOの二人三脚ともいえる密接な関係です。

NGOの非政府は「国境を超える」意味なのに、日本では「政府と距離を置く」と「反政府」などと解釈され、欧米のNGOに大きく後れを取ることになったとみています。

そもそも日本では平和に対す



る考え方、受け止め方がバラバラなんです。太平洋戦争の総括が国民レベルできちんとできていけば事態は違ったと思います。世界の人々が求める平和とは何か。日本人の平均的な平和観は戦争のない状態をいいますが、国際社会ではこれに加え、貧困と災害の克服も平和の三原則として常識になっています。

「今日の生活と明日の希望」。一番大切なのはこのことで、日本人は平和≠非軍事にこだわり過ぎて、国際社会の責務に十分こたえていないのが現実です。

アジア・中近東十カ国へ放浪の旅に出たのは大学四年生の春。医学生だった、十カ月間の体験がAMDAへの道の伏線となる。

③ 困った時はお互いさま

茂氏
しげる

菅波
すがなみ

アジア医師連絡協議会代表

きっかけは小田実さんの当時のベストセラー「何でも見てやる」。リュックサックにこの本を入れて横浜港から出発。インドの救ライセンターで三カ月間研修を受けたあとは全く気ままな放浪生活でした。何度か食あたりになって病院に担ぎ込まれるなど危ない目にも遭ったのですが、アジアの多様性と活気の虜（とりこ）になり、「パンドラの箱」を開けてしまった。以来、二十五年、アジアなしの生活は考えられない毎日です。生まれ育ったのは広島県で、祖父は裁判官。父は法学部出身の高校教師。二人とも世界史が大好きで、子供のころからエジプト文明やシルクロードの話をよく聞かされ、祖父と同じ裁判官になるのが夢でした。

医学部（岡山大学）へ方向転換したのは「シュバイツァーも悪くない」と言った父の一言と、高校二年生の夏、祖父の書齋で偶然見た一枚の写真。若い日本人兵士がニューギニアの海岸で無残に死んでいる、そのシーンがなぜか頭から離れず、アジアへのこだわりと医学で人助けをしたい感情が自然に膨らんだようです。

七九年のカンボジア難民救済で菅波内科医と岡山大学部生二人が現地に飛ぶが、事前調査不足などから難民キャンプさえなかなか発見できず、カラ振りに。

この派遣の失敗は強烈でしたね。我々は人助けの医療チーム。当然、歓迎されるだろうと思っただこと自体、大きな間違いだったわけです。現地の情報と人脈、受け皿がなければ善意だけでは何もできない。この教訓をテコにそれ以来、アジア各国の医学生や留学生との交流を中心にいろんな国際会議を開いたり、現地研修に出向くなど、仲間づくりに奔走する日が数年にわたって続くわけです。

AMDAの旗揚げはそれから五年後の八四年。相互扶助の精神はカンボジアの苦い体験が原点になった。

（聞き手は編集委員 佐藤徳夫）



今年2月、診療所建設プロジェクトでザンビアのルサカを訪れた菅波代表